

「追悼 石川力山氏」

中尾良信

一九九七(平成九)年八月四日午後一時五分、本学とも因縁の深かった駒沢大学仏教学部教授石川力山氏が、虚血性心不全のため、国立東京第二病院で遷化された。享年五十三歳、学位請求論文提出とその出版を目前にしての急逝であり、御遺族はもちろんのこと、大学及び学会関係者は言うに及ばず、曹洞宗の宗門関係者にとっても、まさしく青天の霹靂であり、惜しんでも惜しみ足りるということはない。筆者にとっても、公私にわたって親しくしていただいたこともあって、通夜の一晩を遺体の枕辺で過ごしたにも関わらず、いまだにそれが夢のように思われ、茫然とするよりも嘘か悪い冗談のように思えてならない。冒頭にも述べたように、石川氏は二年間の在外研究の地に本学を選ばれるなど、花園大学とはきわめて深い関係を持たれた。一九九七年度の禅学研究会学術大会において、追悼の報告をするよう勧められ、研究発表会の場にそぐわぬこと、また筆者が適任でないことは重々承知していたが、個人的な感情もあって、自分なりに石川氏の業績を整理顕彰させていた。さらに本年度の紀要編集に当たり、その紙面を頂戴できるということになり、ここに、十分ではないが、追悼の一文を掲載させていただくことになった。本学仏教学科関係者の御好意と御配慮に対し、まずもって甚深の謝意を表しておきたい。

石川氏は、一九四三年宮城県で生まれ、一九六二年護勢寺菅原寛一師に就いて得度、同年高校卒業と同時に永平寺へ安居、さらに福井県大野市の宝慶寺に安居し、晩年の橋本恵光師に隨身された。後年、東京に出てマンションに住まいにいられてからも、本棚に橋本師の写真が飾られ、常に香華が手向けられていたことから察するに、氏において橋本師から受けた薫陶は、きわめて大きな意味を持っていたように思われる。

一九六五年駒沢大学に入学、さらに同大学院に進まれ、仏教学部助手・講師・助教授・教授を歴任、その間、一八七七年から二年間、在外研究の地に花園大学を選ばれている。石川氏と前後して、石井修道氏・伊藤秀憲氏と、三人の気鋭の研究者がいずれも本学において在外研究をされたことは、同じ禅宗系の大学である駒沢大学と花園大学、あるいは愛知学院大学や正眼短期大学をも含めて、きわめて有機的な学術交流がなされるきっかけとなったのである。

石川氏の研究領域は日本中世禅宗史と理解されている。しかしその一方で、氏の研究の特徴はその幅の広さである。特に、早い段階で馬祖を中心とする中国禅宗を研究し、その後も漢籍を含めた基本文献の読解に力を注がれたことが、研究全体の基盤となっている。そうした努力が、中村璋八・中村信幸氏といった中国思想・中国語学の研究者との共著の形で、『菜根譚』『典座教訓・赴粥飯法』の現代語訳（いずれも講談社学術文庫）に結実したといえる。

日本中世禅宗史の研究においては、日本史学を中心とする関連領域の学会や研究会に多く所属され、学術大会へも積極的に参加し、その成果を自らの研究に取り入れられている。また、綿密な史料調査の実施も、氏の研究を支える重要な作業であった。筆者も何回か参加させていただいたが、たとえばある寺院の史料において、興味の対象となるものだけを選び出すのではなく、所蔵されている史料全体を整理分類し、自分とは違った視点からの調査研究を疎外しないことを心掛けた、所蔵者にも後からの調査者にも配慮の行き届いた調査を実施されていた。

石川氏の研究の柱となるものを挙げるならば、その一つに寂円派を中心とする、初期曹洞宗教団史の研究があり、それは『永平寺史』（二巻）の重要な部分として集大成された。また、初期曹洞宗の僧侶の行動を具体的に解明し、日

本仏教史の中で位置づけようとする論文も数多い。そうして、これらの研究を可能ならしめたものに、切紙史料の調査研究があり、これは、これまでほとんど未着手の領域であった。史料の性格上、非公開が原則であることもあって、宗門外の研究者にとつては大きな困難が伴うだけに、曹洞宗侶でもある氏の研究成果が、大きく期待された分野であった。それが、氏の突然の逝去で中断されたともいえ、学位請求論文によって、一応のまとめがなされるはずであったのが、ついに果たされなかった。しかし、幸い完成原稿に近いものが遺されており、関係者の努力と出版社の好意によって、今夏には出版される予定である。

石川氏においては切紙研究の印象が強いが、近代仏教にも強い関心を抱いておられた。特に大逆事件に連座した内山愚堂を、一個の宗教者として再評価し、近代の仏教における社会意識を問い直そうと試みられ、結果として、曹洞宗教団において僧籍を剥奪されていた内山愚堂は、その名譽を復活することができた。この関心は、氏の人権問題への関心の一環でもあり、同じ視点から尼僧史の研究を進めようとして、複数の作業を開始されていたが、この部分は共同研究者の手に委ねられることになる。

石川力山氏の業績を顕彰することは、筆者の能力においても、与えられた紙数においても、不可能であるが、忘れてはならないのは、氏の研究が、基礎研究と実際の史料調査と、さらに歴史的研究と教義理解と、いわばカヴァーすべき領域に満遍なく及んでいたことである。さらには、自らの研究に基づきながら、今日的課題にも積極的に取り組まれたことである。少なくとも学恩を蒙った一人として、及ばぬまでも、かくあるべしと努力したいと念じている。氏の研究の特徴は、その広範な分野の蔵書にも表われているが、それらが駒沢大学禅研究所に、石川文庫として寄贈保存されることを最後に報告し、拙い追悼文を終わりたい。